

タベの空洞

虚空発虚空行きの
とある陳腐な名を冠された軌道上
存在しない者を傍らにして立つ
大通り地下駅構内

投擲する到着列車と共に
行き暮れた空無を折り重ねる
一塊の雪塊

おまえがもし
背中を丸めた年金生活者たる僥倖に恵まれたなら
古い歌でも口ずさめ

薄暗い構内に もし
一筋の日の光が差しこみ
大地を和める青い炎
草原の千の舌が もし

そのような戯れ歌を

どのような明るみを
思い描けばよいというのか
冥王星の
氷河卓の上
極点へといたるカーブの途上
一陣の風が粉雪を払いのける すると
頑なな結晶文字には
次のように記されているのだ

生とは絶えざる投身だと

クレバスの奥深く
宙吊りのままに間氷期をやり過ごし
生き延びることが
ただ生き延びることが
生というものであったなら
おまえのための門には記されていよう

おまえが見るだけの者であるならば
もはや見るな
おまえが聞くだけの者であるならば
もはや聞くな
おまえが書くだけの者であるならば
もはや書くなと

再び一塊の雪塊が
おまえの足下に吹きだまる

いつの日にか そう
億年の後に
地層の奥深く
石灰質のチューブが
検出されよう

今日
いつに変わらぬ夕べの空洞
鉄路に残るひとつの染み